



木曾川、長良川、揖斐川の三川を古来より木曾三川と称してきた。

木曾川は長野県木曾郡木祖村の鉢盛山を水源とし、長良川は岐阜県郡上郡高鷲村の大日岳を、揖斐川は同揖斐郡徳山村冠山をそれぞれ水源とするが、写真ををみてもわかるように平野部にでると、この三川はあたかも寄り添うかのように合流していく。例えば木曾川は深い先行谷を形成しつつ愛知県犬山にでるや、大きな扇状地を堆積して西流し、岐阜県笠松付近にて急に流路をかえて南流する。同様に長良川も中山性の美濃高原を侵蝕しつつ西流するが、岐阜市にでるや突如南進を開始する。この両川の流路の変換点はともに標高10mの線と一致し、この10mの等高線をたどると岐阜県笠松から岐阜市加納、穂積町、大垣市北部をへて垂井町表佐から養老町高田を通して養老断層山地に沿って走っており、円弧状の走向を明確にみせている。この等高線のいたづらが三川の合流となるが、地形学的には濃尾平野造盆地運動により10m等高線内は、依然として恒常的な沈降地域であり盆地状の地形を呈している。

しかし、この造盆地運動は三川合流のフィジカルな要因となるだけではなく、洪水多発と強く結びつき、人々を塗炭の苦しみにおいやるのである。そのためこの地方の人々は営々として^{かこいづつみ}囲堤の輪中を築き対応していくこととなる。この洪水と人間との相剋の歴史をくり返す輪中地域は、また10mの等高線に支配されており、自然と人間とのかかわりあいを端的に示している。

輪中地域の人々も、洪水多発の要因が尾張側^{おかこいづつみ}の御囲堤以外に三川合流にあることを早くより知り「木曾川、伊尾川を海口迄分通し、海へ流入候＝被為御付被下置……」とその分流を歎願し続け、それをうけてかの有名な宝暦治水となるが、今日にみるような三川の完全な分流は、明治の蘭人技師ヨハネス・デレーケ (Johannes Derijke) の改修工事までまたねばならなかった。

(伊藤 安男)